

平成29年度 美咲町立旭小学校 学校評価書

<table border="1"> <tr> <td>学校長</td> <td>光嶋 昭善</td> </tr> <tr> <td>学校関係者 評価委員</td> <td>山本 広文 赤木 健一 石井 千栄子 飯田 純子 大西 洋子</td> </tr> </table>	学校長	光嶋 昭善	学校関係者 評価委員	山本 広文 赤木 健一 石井 千栄子 飯田 純子 大西 洋子	自己評価 総合所見 <p>①ほとんどの評価項目において目標を概ね達成しており、成果を上げている。実践は十分ではないが、挨拶に対する児童の関心は高く、よりよくしたいという意欲も児童会活動などで感じられる。教師からの提示だけでなく、児童自身もモデルとなる挨拶を考えるなど日常生活に生きて働く取組としたい。</p> <p>②課題は「読書時間」「家庭学習時間」である。家庭でテレビ・ゲームに費やす時間との関連が大きいと思われる。学校での指導をもとに家庭で実践できるよう、家庭への啓発活動も含め、学校と家庭との連携をしっかりとる必要がある。</p>
学校長	光嶋 昭善				
学校関係者 評価委員	山本 広文 赤木 健一 石井 千栄子 飯田 純子 大西 洋子				

自己評価 対基準値 S(101%以上) A(90%以上100%以下) B(80%以上90%未満) C(70%以上80%未満) D(70%未満)

評価領域	自己評価					学校関係者評価			
	評価項目	評価指標	評価基準	達成状況	評価	結果の分析及び改善方策等	自己評価に対する意見など		
基礎基本の定着と学ぶ力を培う学習指導の充実	全ての児童を思考のステージに乗せる手立ての工夫と「考える」「書く」「説明する」活動の充実による思考力・表現力の育成	自分の考えや授業のふりかえりを書いている	肯定的評価80%	肯定的評価76.7%	A	友達の発表について意見を言ったり教えてもらったりするなど、友達との関わりの中でわかたりできたりしているという意識を児童は持っている。また、授業をふりかえって、わかったことを再認識したり、自分や友達の取り組み方や努力に気づいたりできつつある。ふりかえりは、学びに価値づけたり、次の学びを自覚したりする活動でもあり、主体的な学びにつながる活動である。文章表現力も必要となる。ふりかえり内容が深まるよう、書く視点や書き方の指導を丁寧に続けたい。	「宿題をしている」子の中には単に空間を埋めているだけの子もいるのではないかと。理解や復習につながっていない子も多いと思われる。「理解しているか」どうかを子どもが自覚することによって、自主学習につながっていく。子どもが間違いに気づいたり、意識を変えたりしていくことにつながるように教師は点検していく必要がある。		
		友達の説明や発表について質問したり、言いかえりしている	肯定的評価70%	肯定的評価68.5%	A				
		友達の意見や友達に教えてもらったことを取り入れて自分の考えを深めている	肯定的評価70%	肯定的評価93.2%	S				
	家庭学習の内容や出し方の工夫による望ましい家庭学習習慣の定着	家庭学習時間 1年20分 2年30分 3年40分 4年50分 5年60分 6年70分	達成者85%	達成者76.7%	A	9月に「家庭学習の考え方」を改定し、家庭学習の意義・内容・仕方・時間の新基準(低学年30分、3年50分、4年60分、高学年70分)等を明示した。児童へ指導し、参観日に保護者にも説明した。 宿題はよくしており、「自主学習もできるようになってきている。しかし、家庭学習の時間が短い児童が多い。新基準での達成率は63.0%しかない。これは自主学習や読書に費やす時間が短いことによる。また、平日の家庭学習時間は60分以上90分未満に49.3%いるのに対し、休日は60分未満が80.8%となり、休日の家庭学習時間が少ない児童が多い。 低学年の内に宿題と読書をするのが習慣化するように指導したい。そして、中学年以上、自主学習の意義や具体的な内容の提示、取り組み方を丁寧に個別にも指導していきたい。		わからないときには聞けば答えを教えられるという受け身の姿勢では、将来働けない。工夫すればいいのに、言われたとおりのことしかできない若者が増えている。自分で考え、工夫して学ぶ子どもに育てていく必要がある。	
		宿題をしている	肯定的評価90%	肯定的評価95.9%	S				
		中学年以上の児童が自主学習をしている	肯定的評価70%	肯定的評価74.5%	S				
	図書室の利用推進と書架やカードの活用による読書意欲の喚起	読書目標冊数 低学年100冊 中学年 70冊 高学年 40冊	達成者70%	達成者83.6%	S	冊数は12月段階で80%を越えており、年間ではほとんどの児童が達成できると思われる。ほとんどの児童が学年の「必読書30選」も読み切ったと思われる。冊数の割に読書時間が短いことから、安易な本を読んでいることがうかがわれる。町の示す「1日30分の家庭読書」は相対的に難しい。また、休日には読書をしっかりとるように指導したが、休日の方が平日よりも読書時間が長いという児童も27.4%しかない。逆に休日の方が読書時間が短い児童が30.1%である。 メディア、家庭学習と一体となった、家庭での過ごし方を指導する必要がある。また、単に冊数や時間を追ったり、読書感想文にとらわれず、「読書のアニメーション」を取り入れた読書(読み聞かせ)、お気に入り本の紹介、書評綴り、1冊の本を巡っての話し合い、音読会、読書感想文など読書の楽しみ方や図書を仲立ちとした多様な活動を通して読書の楽しみを伝えていく必要がある。		子どもは、秘密シリーズ、絵の多い本、会話形式の本など読みやすい本に流れているのではないかと。読み応えのある本や名作にふれることも大切である。読書をするにあたって、読書力も必要だが、まず、集中できる環境が必要である。図書館では集中して読んでいる子が多い。家庭読書をするにあたって、家庭で静かな環境、読書に取り組みやすい環境を作らなくてはならない。	
		1日あたりの読書時間30分	肯定的評価70%	肯定的評価35.6%	D				
	互いに認め合い高め合うかわりづくりの推進	対話的な学習の場の設定・活用による、お互いに認め合い高め合う学習集団づくり	授業で、自分の考えを説明したり、話し合ったりしている	肯定的評価80%	肯定的評価82.2%	S		友達と関わり合いながら学んでいるという意識は高まっている。しかし、自分の考えを伝えきったり、相手の考えをとことんわかるまで聞くということまではしていない。 相手を理解するために考えを伝え合うという意識と技能を高めたい。 明確に意識できないにしても自己肯定感を感じているという児童を含めると94.5%になる。しかし、学校においても、肯定的な言葉かけをし、周囲も良さを認めているにもかかわらず、自覚できない児童が少数ではあるが、いることが気になる。 当事者の納得できる良さ・伸びを提示していくとともに、友達との関わりの中で感じられるよう、特別活動や生徒指導の充実をいっそう図りたい。	家でもっと褒めていかなくてはいけないだろう。また、地域でいろいろな人と関わる機会が少なくなる中で、家族以外の人から評価の言葉をもらうことが減っている。他人からの評価が大きな自信になったり、多様な自分に気づいたりすることになると思うがそれができにくくなっている。 周囲の評価を気にしすぎて、自信を感じられない子もいる。まちがってもいいから「言ってみる」「やってみる」という積極性がほしい。
			わからないことを友達に教えたり、教えてもらったりしている	肯定的評価80%	肯定的評価86.3%	S			
自分にはよいところがある			肯定的評価90%	「明確に自覚」79.5% 「ない」5.5%	B				
しっかりと声を出し、「目を見て 笑顔で自分から」できるあいさつの定着		目を見て 笑顔で(明るく)自分から あいさつしている	肯定的評価80%	目を見て挨拶93.2% (積極的肯定61.1%) 笑顔で挨拶82.2% (積極的肯定53.4%) 自分から挨拶90.4% (積極的肯定57.5%)	S	あいさつは家庭の習慣作りの問題である。顔見知りであればあいさつでもでき、会話にもつながる。しかし、子どもが地域の大人を知らないような状況では、地域でのあいさつは難しくなる。あいさつができないことは自信がないことの表れでもある。			
望ましい生活習慣づくりと運動習慣づくりの推進	目標をもち継続的に取り組める運動の機会づくりによる運動の日常化	1日に1回は外遊び・体育館遊びをしている	肯定的評価80%	肯定的評価79.5%	A		「見てはいけない」のがアウトメディアだと思っている親がいる。撮りためておいて、取組期間が終わったら、ビデオ漬けということは事実としてある。取組が形骸化している。取組の目的が理解されていない。 「スマホ・テレビをやめて、何をやるのか」を考えなくてはならない。家庭読書もそうであるが、家庭に電子音のない日が必要となっている。これまでの取組にはない工夫が必要である。「子どもが本を読んでいるときに家族は何をしていたのか」と、子どもが親・家族をチェックするような取組があってもいいのではないかと。		
	課題の見える化や家庭への具体的な働きかけによる基本的な生活習慣の確立	平日の1日あたりのディスプレイ接触が2時間以下	肯定的評価80%	肯定的評価85.0%	S				
		朝晩、歯磨きをしている	肯定的評価80%	「毎日している」84.0%	S		平日のディスプレイ(テレビ、ゲーム)接触は多くの児童が2時間を切っている。しかし、9月からの新基準(1時間:県基準)では46.6%となる。帰宅後の生活時間を考えると1時間未満にしたい。 アウトメディア週間の取組をきっかけとして、ディスプレイを離れて何をやるのかという積極的な時間の使い方を身につかせ、身につけさせたい。 歯磨きは多くの児童ができてはいるが、「毎日丁寧に(54.8%)」「しないことが多い(5.5%)」と問題もある。う歯罹患率の高さからも学校での磨き方指導と共に家庭への協力のいっそうの働きかけをしたい。		

学校関係者 総合所見 <p>①理解につながる家庭学習の仕方を身につけさせたい。 ②活動の「ふりあえり」をすることで、主体的に学んだり活動したりできる子になってもらいたい。 ③自信をもたせること、あいさつ、メディアとのかかわりなど家庭教育がベースにある。保護者への啓発、連携した指導も考える必要がある。</p>	学校関係者評価を 受けての対応 <p>①メタ認知を大切に家庭学習となるよう、自主学習の考え方・仕方の指導を行うとともに、自主学習につながる点検を行う。また、授業においても、体系知と方法知の双方の指導を行う。「家庭学習のてびき」などを使い、家庭への啓発・協力を定期的に行う。 ②メッセージによる感謝・承認の言葉かけをいっそう増やす。児童会と連携し、望ましいあいさつのイメージづくりと自己のモニタリングを行うとともに、校外でのあいさつの状況についても把握し、指導する。 ③「アウトメディア週間」の取組は改善プランができており、「メディアからめくって、何をやる」「日常的に何が出来る」ということに取り組む。</p>
---	---